

5月10日 (日) ヨシュア 5章	「彼らが土地の産物を食べ始めたその日以来、マナは絶え、イスラエルの人々に、もはやマナはなくなった」(12節)。「先にヨルダン川東に入植していたルベンとガドは「おびたしい家畜」(民32:1)を持っていたにもかかわらず、この日まで主からマナの恵みを受けていたのだろうか。何度も主から離れる人々をそれでも養い続けられる主の恵みに気づかされる。
11日 (月) ヨシュア 6章	「遊女ラハブとその一族、彼女に連なる者はすべて、ヨシュアが生かしておいたので、イスラエルの中に住んで今日に至っている」(25節)。ヨシュアの斥候二人を匿い、逃がしたラハブは一族と共に命を守られ、彼らだけがイスラエルの人々の間に暮らし続け、やがてイエスの誕生につながっていく。主が行われるみ業は、人の思い及ぶことではないことが分かる。
12日 (火) ヨシュア 7章	「イスラエルの人々は、滅ぼし尽くしてささげるべきことに対して不誠実であった」(1節)。「ささげるべきこと」について、わたしたちは、何をどれほど求められているだろうか？ 十分の一献金、奉仕、祈り、伝道…。すべてにおいて、誠実に自らをささげることは、容易ではない。主の愛と憐れみをいただいている恵みを忘れず感謝し信頼して、歩み続けるほかにない。
13日 (水) ヨシュア 8章	「その後ヨシュアは、律法の言葉すなわち祝福と呪いをことごとく、すべて律法の書に記されているとおりに読み上げた」(34節)。旧約の主は、イスラエルの民を祝福するために集められた。しかし祝福の言葉だけで、厳しい戒めがないと人はすぐに思いあがり傲慢にふるまってしまう弱い存在なのだ。厳しい呪いの言葉に込められた祝福への招きを覚えたい。

14日 (木) ヨシュア 9章	「我々はイスラエルの神、主にかけて彼らに誓った。今、彼らに手をつけることはできない」(19節)。ギブオンの民はイスラエルを欺いて生き延びた。その欺きが発覚し、「ギブオンの民を滅ぼすべきか否か」で意見が割れた時、ヨシュアたちは主の名にかけた誓いを尊び、主も誓いを守る選びを認められた。「滅ぼす」よりも「共に生きる和」を尊ぶ世界を祈りたい。
15日 (金) ヨシュア 10章	「主がこの日のように人の訴えを聞き届けられたことは、後にも先にもなかった。主はイスラエルのために戦われたのである」(14節)。主は、常に民に先立って戦ってくださったが、人の訴えを聞き届けられたのはこの時だけだという。キリスト・イエスを信じる者が一人も欠けることなく、祈り求めるならば、世界中にキリストの平和が訪れることを信じて歩みたい。
16日 (土) ヨシュア 11章	「彼らの心をかたくなにしてイスラエルと戦わせたのは主であるから・・・」(20節)。イエスは、ユダヤ人も異邦人もなく、主の憐れみと恵みをいただいていること。今、爆撃にさらされているパレスチナの人々、ムスリムの人々をも主は憐れみ、共に傷を負い呻いておられることを教えてくださった。そのイエスに従う者として「ヨシュア記」をどう読むのかが問われている。
17日 (日) ヨシュア 12章	「ヨシュアの率いるイスラエルの人々がヨルダン川のこちら側、すなわち西側で征服した国の王は次のとおりである」(7節)。12章は「征服された王のリスト」だが、各々の王の背後におびたしい民の命の犠牲があつたことを覚えたい。沖縄の「平和の礎」が、敵味方関係なく沖縄戦で命を失ったすべての一人ひとりの名を刻んで追悼しているように。